「秋田大学研究者海外派遣支援事業」帰国報告書

平成 22 年 6 月 25 日

所属・職名：教育文化学部・講師
氏名：松本奈緒

派遣期間：平成 21 年 9 月 23 日～平成 22 年 5 月 9 日
派遣研究機関名：英文　The University of North Carolina at Greensboro
　　：和文　ノースキャロライナ大学グリーンズボロ校
研究課題：米国ムーブメント教育論におけるムーブメントコンセプトの特徴と体育カリキュラムに与える影響

○研究概要

アメリカのムーブメント教育論には２つの源流がある。ひとつはアメリカの大学や女子体育の研究者が運動の基本構成要素について考え、それを理論化したものである。代表的論者として Glassow や H' Doubler がいるが、彼らは運動を「ムーブメント」と表記し、ボディメカニクスやダンスの身体理論として構成した。もうひとつの源流としてイギリスから Laban のムーブメント原理を中心としたムーブメント教育がある。Laban は振り付け家でありダンス教育者であったが、当初ダンスの身体トレーニング法とバランスのよい振り付けの手がかりとしてこの理論を構成した。しかし、Laban のこの理論はダンスだけでなく身体運動全般を考える上でも優れた理論であると考えられ、体育全般に普及しイギリスの体育のナショナルカリキュラムに位置づけられていた。1950 年代半ばに英米合同の現職体育教育者ワークショップが開催され、これを契機としてムーブメント教育論がアメリカに伝わることとなったが、主に脆弱であった小学校体育プログラムの部分に適用され、また、ムーブメントを中心とした理論は体育全体を包括する新しい体育理論として注目されるようになった。

現在のムーブメント教育論の概念的枠組みをみると、ボディメカニクスの科学的視点を含めたアメリカ独自のムーブメント概念と動きの質に着目した独自の理論を持つ Laban のムーブメント概念、その他のムーブメントに関連する理論から派生した概念が混合して存在している。それらのシェアや主にどのムーブメント概念に依拠するのかは各論者によって異なるが、何を中心としてムーブメント教育の学習を展開するのかという視点でみると大きく次の３つのアプローチに分けることができる。科学的概念獲得を中心としたアプローチ、技能獲得を中心としたアプローチ、子供の成功体験を中心としたアプローチの３つである。Logsdon（1997）は Laban のムーブメント概念を中心としてカリキュラムを展開し、身体（身体の何が動くのか）、空間（身体がどこで動くのか）、エフォート（どのように身体が動くのか）、関係性（ムーブメントの中で起こること）の４つで運動を

捉えている。この場合、移動の運動、非移動の・その場の運動、操作の運動は身体の一構成要素として存在する。Graham（1994）は技能獲得を中心としたカリキュラムを構成し、Laban のエフォート、空間意識、関係性という概念と移動の運動、操作の運動、非操作の運動という３領域に区分した運動技能をクロスさせ、ムーブメントを学習することを提案している。Buschner（1994）はボディメカニクスやバイオメカニクスの理念を中心として技能獲得を行うカリキュラムを展開している。Buschner は Laban のムーブメント概念から身体意識、空間意識、エフォート、関係性をとりあげ、移動のパターンと操作のパターンの２領域で区分したムーブメント技能とクロスさせている。Allison と Barrett（2000）は Laban のムーブメント概念を中心とし、身体、空間、エフォート、関係性の４概念を使用してカリキュラムを構成している。運動要素のカテゴリーとして彼女らはゲームをムーブメント技能と基本的な戦術・作戦の２領域、教育的体操を移動と静止の運動、重心制御とバランスの運動、重心移動の運動、連続した体操の動きの４領域、教育的ダンスをダンス要素（移動の運動、空間、ダイナミクス、リズム、創造性・批判的思考）と振り付け（過程、構造、パートナリング、自己表現とコミュニケーション、創造性・批判的思考）の２領域で捉え、Laban のムーブメント概念とクロスして学習で用いている。

学習の中で生徒はムーブメントタスクに沿って自分なりに展開したムーブメントで解答を行う。生徒は学習の中で主体的な意思決定者として活動し、技能的に動くこと、運動に関しての概念を学ぶこと、学んだ運動の概念をあらゆる運動場面や自分の動きを修正する場合に応用することを目指し学習する。ムーブメント教育論において子ども中心の方法論が着目され、多くの文献で取り上げられているが、それはこのようなムーブメント教育論特有の指導過程にある。ただのスキル練習を繰り返すだけでなく問題解決的に技能改善を目指すことによって、運動において実際に困難な課題に直面した場合に、子ども自身が課題改善や技能改善を行えることを意図している。

現在のアメリカの小学校体育において、ムーブメント教育論は最も影響力のあるカリキュラムモデルのひとつとして存在している。しかし、伝統的な教師主体の方法とはまったく異なる方法論上の理解の不足、子ども中心の問題解決、誘導発見学習を十分行えるだけの教師の指導力が不足していることからムーブメント教育を実施するうえでの困難も存在する。今回は何人かのムーブメント教育論者のカリキュラムの中核となるムーブメント概念を中心に研究を行ったが、今後各論者のカリキュラム構造をより詳細に検討すること、実際の学習場面を想定した上でのムーブメント教育論の特徴や限界を明らかにする必要性が指摘できるであろう。

○研究期間全般にわたる感想

研修先であるノースキャロライナ大学グリーンズボロ校は州立大学であり、教員養成校として古い歴史を持つ大学である。私の研究の関心事であるムーブメント教育に関しても著名な研究者である Barrett 博士が長年在籍していた大学であり、図書館にムーブメント教育に関する貴重なコレクションを所蔵している。また、図書館では研究のデータベースや電子ジャーナルを閲覧することができ、これらの資料を用いて文献収集を行えたことは研究を進める上で大きな前進ができた。さらに彼女の退職後であり本来ならば実現が難しいことであったが、Barrett 博士と直接対面しムーブ

メント教育の研究について論議することができた。Barrett 博士は自分自身の研究に対する質問に対しての答えやこれまでムーブメント教育論をアメリカで推奨する上での苦労について語ってくださり、また、ムーブメント教育の研究に関するコレクションを分けてくださった。これまで文献の上でのみ知ることのできたBarrett博士と直接会って、論議できたことはこの上ない喜びであり、これからムーブメント教育論の研究を進めていく上で大きな糧となるであろう。

研修中、自分の関心事の研究テーマ以外にも様々な体験が行えた。受け入れ先の大学の２つの学期に渡って滞在したが、指導教官であるEnnis博士の学部や大学院博士課程の授業を参観、参加することができた。学部の初等体育、中等教育体育の模擬授業や教育現場での授業実習を中心とした「カリキュラムと指導Ⅰ・Ⅱ」の授業を参観できた。これらは秋田大学において私自身が担当する「初等科体育」、「保健体育科教育学概論Ⅱ」「保健体育科教育演習Ⅱ」と似通った内容を持った授業であり、今回これらの授業を参観できたことは今後の授業改善に役立てることができると考えている。

ノースキャロライナ大学グリーンズボロ校

指導教官のEnnis博士と共に

中等教育体育を中心とした「カリキュラムと指導Ⅰ」の授業（週に２コマずつ２回実施）では、フィットネス教育論モデル、スポーツ教育論モデル、TGFUモデル、キネシオロジーモデル、社会責任モデル等の各種のカリキュラムモデルの原理を示し、それらを網羅する形で学生が主体となって模擬授業や高校での授業実習を行っていた。高校での授業実習だけでも学生が６回以上指導を行い、授業外での担当教官との指導案の検討を含め自主的に授業準備を行い、現実の授業現場でのリアルな実習体験を元に体育指導に関する知識や実施力が確実に身につく質の高い授業であった。初等体育を中心とした「カリキュラムと指導Ⅱ」の授業（週に１コマずつ２回実施）では、ムーブメント教育論のカリキュラムモデルの中で学生が体操、ダンス、ゲームの指導を行う授業であったが、この授業でも模擬授業や教育現場での授業実習（７回実施）を中心としていた。特にこの授業では構造主義者の視点と体育の授業を通じて学習者が体育の概念を獲得できることが強調されていた。この授業でも学生が小学生対象の体育授業の工夫や体育指導を行う際の基本知識、ムーブメント教育論の特徴であるムーブメント概念を中心とした体育学習の指導方法の実践力を身につけられる質の高いプログラムであった。また、この授業では授業を観察者として参観するだけでなく、参加を行い、アメリカの小学校体育現場において自分の関心事であるムーブメント教育論モデルを用いた

体育授業指導を実際に行うことができた。協調性よりも自己主張や自我を育てる文化的基盤の違いや体育指導に必要な語学力の不足等、困難がなかったわけではないが、実際の指導経験から得た指導実感は大変貴重なものであり、これからムーブメント教育論の研究を続けていく上でも糧となるであろう。

大学での模擬授業

AAHPERD での学会発表セッション

大学院博士課程の授業では「カリキュラム論」、「独立研究」の２つの授業に参加した。「カリキュラム論」では、Kirk らの Handbook of physical education（2006）の講読とディスカッションを行った。このテキストは体育科教育学の近年の関心事のレビューであり、日本ではまだ一般的ではないが諸外国では研究の重要なトピックスとなっている諸概念について知ることができた。また、この授業のディスカッションを通じて、カリキュラム論の著名な研究者であり構造主義の視点から質的研究を行っている Ennis 博士の知見に触れることができた。「独立研究」ではエスノメソドロジーの視点から質的研究の方法論を学ぶ授業であったが、最新の質的研究に関する論文を講読しディスカッションを行うだけでなく、実際に自分のテーマに沿って質的研究のパイロットスタディを行った。私は小学校体育授業のオーセンティックラーニングを阻害する因子の研究というテーマで研究を行い、約２ヶ月の間、週１回近隣の小学校へ通い、体育授業の観察、指導者へのインタビュー、児童へのアンケートとインタビューを行った。実施を伴いながら研究方法を深く理解できただけでなく、研究目的を追求する過程で文献では分からないアメリカの小学校体育の現状を知ることができた。さらに、中間発表と最終発表としてパワーポイントを用いての発表や英語での研究報告書をまとめることに挑戦し、Ennis 博士より助言をいただくことができた。これらの経験は今後国際学会等で研究成果を発表する際に大いに役立つ経験であろう。

さらに研修期間中、AIESEP（国際高等体育教育協会）、AAHPERD（全米体育協会）、NDA（全米ダンス協会）の３つの学会に参加することができた。これらの学会を通じて、国際規模、あるいは全米規模の体育科教育、ダンス教育の最新の研究に触れ、研究者同士の交流を行ったことも非常に貴重な経験であった。一研究者として知見を広め、今後の自分の目標をより明確に描くことができた。

以上のように私にとって非常に実りの多い研修となった。最後になるが、語学力の不足や生活面の慣れない点等、様々な面からサポートを行ってくれた受け入れ先の Ennis 博士、Barrett 博士、Chen 博士、Saffrin 博士、Stinson 博士及び大学院生、国際交流課の皆様に感謝の意を表したい。